１９８０年5月7日　第三種郵便物認可　２０１３年1月１５日発行　ＫＡＳ１３９３号

毎月１回１５日発行

KAS マンスリーやまた

自閉症者の地域生活を援助する
社会福祉法人　横浜やまびこの里
〒224-0024　横浜市都筑区東山田町２７０番地

小田急　3000 系（通称 SE 車）
日本の高速鉄道車両の礎になった
技術的にもデザイン面からも記念
すべき車両です。

【２０１３年１月号】

▼ＦＭやまびこ　畔上　聖史　２
△ＦＭやまびこ番外編その１　小林　邦子　８
▼自閉症児の親も一日にしてならず　ｍｏｍｏｅ　１２
△ノートンの映画大好き！　ノートン　１５
▼ＦＭやまびこ番外編その２　草島　聡　１６
△本棚から　西尾　紀子　１８

◆コラム　（山田　なつき）・・・　６
◇疑問符だらけの現場用語集　・・・　７
◇よこはま三歩　（入江　麻美）・・・１９
◆後援会・編集後記　・・・２０

アイテック発（初）の就労支援

地域活動支援センター　アイテック　畔上聖史

●はじめに　～アイテックの紹介～

アイテックは横浜市都筑区大熊町にある地域活動支援センターです。小規模な作業所の様なイメージで、現在は１０名の自閉症の方が利用しています。日中は受注作業を中心に提供し、通所、家事、買い物、余暇活動、健康管理・・・と、ひとり一人のニーズに合わせて生活全般の支援を行っています。

２０１２年９月、アイテックを利用していたＡさんが製菓工場に就職しました。今回はこれまでの経過、これからの目標や課題について、紹介したいと思います。

●２００６年　～アイテック利用開始前のＡさん～

Ａさんは２０代の男性です。小・中・高と普通校に通い、高校卒業後は単身赴任中のお父さんと東北に住んでいました。在宅生活が続いていたので、Ａさん自身もご家族も何かやりたい、させたいと思い立ち、郵便局のアルバイト面接を受けましたが、結果は残念ながら不採用でした。仕分け作業であれば出来るのでは・・・と選んだ職種でしたが、面接での質問に答えるのが難しかったようです。

その頃、仙台の精神科クリニックで心理検査を行い、①てんかん、②広汎性発達障害、③適応障害との診断を受けました。

●２００７年　～「横浜市発達障害者支援センター」利用、進路の検討～

Ａさんはお父さんと一緒に横浜へ帰り、お母さんと３人での暮らしに戻りました。その後、就労相談を目的に、法人内の「横浜市発達障害者支援センター」を訪ねられ、数回の相談を経て、療育手帳を取得しました。

当時からご家族は「将来的に就職をさせたい。」と考えていましたが、その一方で「どのように動いていくのが良いかわからない。」とも思っていました。発達障害者支援センターでの面談を続けながら進路を検討し、就労へ向けての第一歩としてアイテックが日中の通所先の候補になりました。

●２００８年　～アイテック利用開始～

事前に家庭訪問を行い、ご家族が「日中に通う場所を見つけ、将来は自立して働いてほしい。」と希望していることを確認し、Ａさんの「質問に答えるのに時間がかかる。」「考えていることを言葉で表現するのが難しい。」「他者に上手く伝えられず理解してもらえなくてイライラする。」といった特性、昼夜逆転の生活状況等も聞き取りました。

４日間の体験実習を経て、以下４点を目標として設定しました。

①毎日通所する、身だしなみを整える等、生活のリズムを形成する。
②出退勤時間を守る、自立して次の活動へ移る等、時間を意識して行動する。
③受注作業に取り組み、精度やペースを向上させ、動機になるものを探る。
④わからない時に質問する、必要な物事がある時に要求する等、コミュニケーション・スキルを身に付ける。

以上を踏まえて、２００８年４月、就労へ向けての基礎を作るステップとしてアイテックの利用を開始しました。在宅生活が続いていたため、週３日の通所から始め、様子を見ながら半年の時間をかけて、週５日へとつなげていきました。

同時期に週１～２日、アイテック隣接の洋品雑貨店で服の値札付け、値段シール貼り等の仕事に参加する機会もあり、目標③と照らし合わせると、アイテック外での活動自体が動機になる様子で、安定した通所を維持していました。しかし・・・

●２００９年　～生活のリズムの形成、てんかん発作の服薬調整～

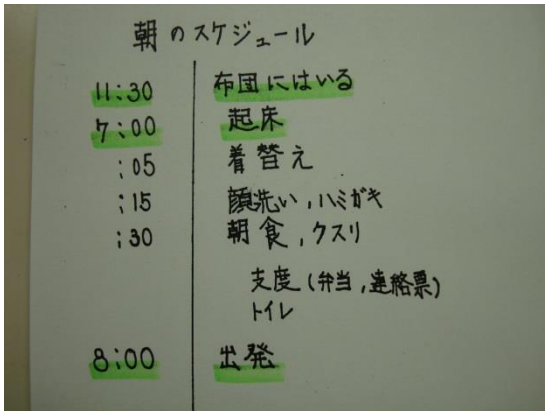
洋品雑貨店の閉店に伴い仕事が終了し、毎日アイテック内で過ごすようになったことから、他の利用者との人間関係、学生時代の思い出、気分の波・・・と考え事や悩み事がたまっていき、動機が減退して遅刻や欠席が増加していきました。そこで利用開始時の目標①②を達成するため、職員との面談の実施、動機の開拓、約束の提示といった支援を考えました。

まず月１回、Ａさんとアイテック職員で面談を実施し、生活全般において困っていることを話し合い、就寝、起床、食事時間等の情報を聞き取り、具体的な目標や課題を設定しました。この面談は目標④とも関連しており、Ａさんは自ら発信することが得意ではなかったので、他者にヘルプを出す経験を得る場としてのねらいもありました。数年後には困った時に相談する力を身に付けていきました。

次にアイテック職員との外食を報酬としたポイント表を導入しました。出席したら１個、遅刻をしなかったら２個・・・と毎日シールをためていき、１ヶ月間で目標枚数分たまったらレストランに行けます。これは作業においては時間内に一定量を達成することが動機になっているという評価に基づき、遅刻や欠席に対しても一定の枠組みの提示が有効な可能性があると考えて始めたものです。目で見て確認出来るように文字やカレンダーを用いることで、外食に行ける条件やシールのたまり具合がわかりやすく、Ａさんは意欲的に通所するようになりました。また家族以外の他者との交流の経験が少ないＡさんにとって余暇のイメージを広げ、楽しめる活動を探ることも目的でした。【写真①】

そして面談での聞き取りを基に、就寝から出勤までの時間や通所ルートを整理し、家庭用のスケジュールを作成しました。毎日通所する、出退勤時間を守る、と改めてルールを守ることを伝え、目覚まし時計の使用も開始しました。視覚的に確認し合える物が出来たことで、遅刻や欠席をした時にスケジュールを介して振り返り、改善点を絞るのに役立ちました。【写真②】

【写真①】



【写真②】

以上の支援を継続することで、動機が増進して遅刻や欠席が減少し、安定した生活のリズムが形成されていきました。

アイテック利用開始後も３ヶ月～半年に１回はてんかん発作が続いていましたが、この時期に初めての重積発作がありました。これを機に転院して専門の医師が主治医となり、服薬調整の結果、２０１３年１月現在まで約３年間、発作は起こっていません。このことはＡさん本人やご家族の精神的な安定につながっていると思います。

●２０１０年　～就職ニーズの再確認～

アイテック利用開始から２年が経ち、生活は軌道に乗ってきましたが、お母さんから「将来への漠然とした不安がある。」と相談があり、就職を希望していることを再確認しました。

就労支援はアイテック職員にとって初めての経験だったので、法人内の就労支援部門の「ワークアシストやまびこ」に協力を依頼し、具体的な進め方を相談しました。就職を目指す人が活用可能な地域資源、相談機関、体験実習等の情報を収集することから始め、現状の力がどの程度なのか確認することを目的に、「ゆめコープ川崎センター（当時）」で３日間の評価実習を実施しました。

●２０１１年　～「ゆめコープ横浜北センター」利用、就職の準備～

就労に必要な課題を整理するために、法人内外の機関を活用していくという方針を基に、次のステップとして長期間の評価や訓練を目的に、２０１１年５月、「ゆめコープ横浜北センター」グループ就労訓練（企業内訓練）の利用を開始しました。

週４日、企業内でカタログの運搬棚卸し、清掃等の作業に従事し、一般の職場で必要な身だしなみ、振る舞い等の基本習慣を獲得していくのと共に、以下の通りＡさんの評価を整理しました。

- 一人で仕事をするのではなく、従業員や仲間達の中で役割を実感しながら気持ち良く働ける職場環境が理想。
- 几帳面で丁寧なため、一般より時間はかかる反面、習得した仕事の精度は高く、安定感がある。
- 決められた社内のマナーやルール、挨拶等は意識して守れる。
- 穏やかな性格で、真面目で好かれやすいキャラクター。

以上を踏まえ、就職活動へと移行していくために、アイテック職員は「就労支援センター」や「ハローワーク」等の外部資源を活用する方法を学び、準備を進めました。

●２０１２年　～製菓工場での勤務開始～

「ゆめコープ横浜北センター」利用開始から１年が経ち、訓練を継続しながら職を探していたところ、製菓工場の求人情報が入ってきました。Ａさんに適していると判断し、「ワークアシストやまびこ」職員（ジョブコーチ）と連携しながら先方との調整や交渉、会社訪問と工場見学、職員のアセスメント、Ａさんの実習と順調に進めて、２０１２年９月、パート社員として採用されました。

Ａさんの持ち場は菓子箱を検品し、段ボール箱に詰め、パレットに積む工程です。ベルトコンベアのスピードが速く、楽な仕事ではありませんが、ベストを尽くして取り組もうとする姿はこの４年間を振り返ると、頼もしさを覚えます。【写真③】

ある日コンビニで、自分が検品している商品が並んでいるのを見つけたＡさんは嬉しそうで、達成感が漂う表情は私にとっても印象的でした。

【写真③】

●おわりに　～今後について～

これまでの経過を書いてきましたが、これからの目標や課題にも触れておきたいと思います。

私は職に就くこと自体がゴールではなく、長く働き続けることが目標だと考えています。動機になるものを探ることは継続的な課題で、余暇活動、賃金の使途、暮らし方・・・と次は何を目指そうか、Ａさんやご家族と一緒に考えていきたいという思いでいます。

一人の利用者さんの受け入れから１つずつ着実に積み上げ、就労支援の進め方を学び、法人内外の資源を活用して就職まで辿り着き、この様な支援に携われたことをＡさん、ご家族、関係機関の方々に感謝しています。今後の経過についても、またの機会がありましたら紹介出来ればと思っています。

～コラム～

今年度４月からポルト能見台に勤務しております、山田なつきと申します。どうぞよろしくお願い致します。

私は伊豆大島の出身で、中学卒業と同時に大島を出て、その後都内や神奈川県内で何度か引越しを繰り返し、現在は横浜市の北部に住んでいます。ポルトまで片道１時間程かけて通勤しています。働き始めた頃は、その１時間をつらく感じていたのですが、今では慣れてきて外の景色を見て楽しめるくらいに余裕が出てきました。

北部から南部に通勤していて驚いたことがあります。それは天気の違いです。朝、家を出るときは雨が降っていて傘が必要なのですが、京急線に乗り換えると晴れていて傘を持っているのは私だけ！？なんてこともしばしばあります。そして傘を持ってきているのをすっかり忘れて降りることも・・・。同じ横浜市内でもこんなに差があるのだと、改めて横浜の広さを感じました。

もっと余裕が出てきたら、途中下車して寄り道をしてみたいと思っています。横浜のことはまだまだよくわからないので、おすすめスポットなどがありましたらぜひ教えてください。

ポルト能見台　山田なつき

疑問符だらけの現場用語集

～その47～　利己的な行動、利他的な行動

すでにお伝えした通り、本誌を発行する横浜やまびこの里は、「私たちは、自閉症の人をはじめとする障害者・高齢者などの地域生活支援システムの構築を進めます」と謳い、「一人ひとりに対して、その障害を理由に社会から排除されることなく、積極的な社会参加が可能になるように活動します」と表明しています。私が代表を務める自閉症eサービスでは、「自閉症支援を生活のすみずみに」という理念を掲げて活動しています。この意味するところは、アンチ“専門家集団の囲い込み”です。自閉症支援のノウハウや実践は、誰もがアクセスでき、誰もが享受できるものであるべきだというメッセージです。

さて、そういう理念に対しいつも投げかけられるのは、「そうは言っても現実は・・・」「それは綺麗ごとにすぎない。実際はもっと大変なんだ」「それはそれでいいけど、自分の仕事が増えるのは嫌だ」といった、現場からの挑戦です。理念に対する組織的な言い分もよく聞かれます。「資金がない」「スタッフが集まらない」「賛同者がいない」「自分たちがやらなくても、どこかほかの組織がやってくれるだろう」などなど。やらない言い訳はいくらでも挙げられます。

こういう組織の都合や現場の都合を限りなく追及していくと、結局、どういう事態になるでしょうか？それは「自分のやりたいことしかしない」という意味で、利己的な行動を優先し、利他的な行動の否定に向かうのです。

論理的な帰結として、たとえば、横浜やまびこの里が理念として掲げる「一人ひとりに対して、その障害を理由に社会から排除されることなく、積極的な社会参加が可能になるように活動します」という意思表示も、実は「ただし、自分たちの都合を優先します。自分たちのやりたくないことはやりません」という本音が潜み、それが時には組織の判断や個々人の仕事の仕方にも現れてしまうのです。

もし本当に、あなたが利己的な動機で仕事をしたいのなら、それも障害者と呼ばれる社会的弱者を相手にそういう仕事をするなら、公金を当てにしたり、社会的な善意やサポートを求めたりしてはいけません（という職業倫理を、社会福祉を生業とする者は守ってほしいと思います）。さっさと社会福祉法人や NPO 法人というフィールドから離れ、自分で一から事業を立ち上げ自分で好きなようにやってください。と言っても、最低限法律は守らないといけませんが（違法な貧困ビジネスなど、もってのほかです）。

社会福祉を生業とする私たちが今もらっているお給料は、社会全体からの税金だったり、ノーマライゼーションの社会を期待する多くの人々の寄付や助成金だったりします。決して自分たちの利己的な行動の対価や報酬として、そのお金が支払われているわけではありません。世の中のため、社会的弱者に置かれている人たちのために、一生懸命利他的に仕事をしているという性善説のもとで成り立つ社会の合意事項なのです。そこに居る私たちは、利他的に仕事をする人たちであることを、忘れてはいけません。

＜横浜やまびこの里専門員　自閉症eサービス代表　中山清司＞

FM やまびこ　番外編

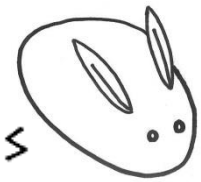
振り返る道向かう道①　～天才児か大物か～

小林　邦子

東やまたレジデンスに入所という大きな幸運をいただいて１６年。息子俊文は４０歳代後半に達した。保護者としてこの紙面に登場してよいものか、ほかにも書きたい方々もいるだろうと案じながら、最重度の自閉症という障害を持った俊文のたどってきた道を綴ってみる。「自閉症」という診断名が出たのは４０年余り前の３歳の時だったが、当時はほとんど受け入れの場もなく、世間の理解は得られなかった。自分の意思を表すことができないため本人にとって厳しい道であったが、ようやく適切な支援指導をいただくようになり、現在は穏やかな日々を過ごしている。俊文の過ぎた道を振り返り、高齢者の域に入った保護者として、今後に向かってゆく道をあらためて考えてゆきたい。

俊文は昭和４１年３月５日に次男として誕生した。乳児期の発育は早く、眼を輝かせ、活発に動きまわる姿は健康児そのものであった。つたい歩きをするようになると縁側のガラス戸の鍵に関心を持ち、小さな手で鍵ねじを飽きもせずに左にまわしている。何日か後、左に回し続けて鍵を引き出し、ガラス戸を開けることを覚えた。なんと知恵づきの早い子よ、天才児だろうかと親の夢はふくらんだ。

「この赤ちゃん、お宅のあかちゃんでしょ。バス停にいましたよ」
突然、玄関からけたたましい声がした。中年の女性が土で汚れた俊文をかかえて立っている。俊文はハイハイをしてバス停にやってきたのだという。日曜日の朝のことで、夫は新聞を読み、私は台所で家事をしていた。「えーっ、いつの間に」。俊文は玄関に下り、鍵をあけ、ガラスの引き戸を少し開けて、バス停まで這っていったらしい。バス停までは空き地を通って５０メートルほどだが、何ということだろう。「こいつは大物になるぞ」。夫は眼を細めたが、途方もない大物であった。誕生日を迎える少し前のことで、ひとり歩きを始める直前だった。つたい歩きは、ほとんど壁などに触れずに歩を進めているのに、誕生日を過ぎてもひとり歩きをしなかった。しかし１年１ヶ月、突然バタバタと６、７歩あるいた。おそるおそる第一歩を踏み出した兄とは全く違っていた。



１歳半を過ぎても俊文に言葉がなかなか出ず、「俊文、ごはんよ」と言ってもまったく聞こえないように通じない。しかし、スプーンで茶碗を軽く叩いて音を出すと、すぐにやってくる。水道の蛇口をよく締めずにおくと、俊文はしずくの落ちる小さな音をひどく気にする。物音には耳が聡いのに、人の言葉は耳に達しないのか不可思議な子供だと感じた。「お利口そうな顔をして」と人に言われるし、一人でよく遊ぶ。積み木の裏表を見つめながら、丹念に一列に並べる遊びに没頭する顔つきは、とても遅れを持っているとは思えない。なにか目にみえないバリアが俊文を覆っているような、意思の疎通のできないもどかしさであった。

早朝に出勤し帰宅は夜遅い夫は、休日をほとんど眠っているのは仕方ないことである。兄は俊文より１歳３ヶ月上で、よく俊文の面倒を見てくれたが、まだ幼い。主婦としての私は、毎日の育児から逃げ出したい思いに駆られるようになった。俊文をおぶい紐で背負い、２歳の兄の手をひいて、遠方の友人の家などを迷惑もかえりみず訪問していたが、外出することで気が晴れた。

俊文は背負われても決して母親の背にぴったりと接するという感じはなく、電車やバスの中では、手すりに手を伸ばしてしっかりとつかんで離さない。母の背中であっても孤独だったのだろうか。声もあげずに背負われていたので言葉かけもほとんどせず、育児放棄の状態と同じだったが、母の背で展開する景色を興味深く眺めていたとも思える。

俊文を集団の中に入れて刺激を与えたら言葉が出るかもしれない。母親が勤めを持っていれば保育園に入れることができると知った。近くにある電子部品組み立ての会社に交渉して、パート従業員である証明書を書いてもらい、市立の保育園に２人の入園が叶った。兄は３歳３ヶ月、俊文は２歳になる直前であった。

保育園での初日、俊文はずっと泣いていたという。兄は俊文をなぐさめながら自分も泣いていたと話を聞かされ、母として心が痛んだが、昼間は自由になってのパートの勤めは楽しかった。しかし何日たっても俊文は園に馴染めないようである。迎えに行くと俊文はいつも柵の高いベッドに入れられ、柵につかまってみんなの遊びを見ているのみである。「お母さんがお迎えよ」と声をかけられても無反応で、気づいてみると暗く表情の乏しい子となっていた。

入園して４ヶ月経ったころ、園より話があるといわれた。「俊文君は、なにか普通の子とちがいますね。すぐに外に出ようとするので、１日中柵のなかです。俊文君のためにも、お母さんが家で見られた方が良いのではないでしょうか」と、園長より児童相談所での検診を勧められた。不安な思いで相談所に行くと、俊文の様子から情緒障害の疑いがあると診断された。初めて耳にする症名であったが、小学校入学時までに普通に発育こともあるという言葉にすがる思いだった。保育園は俊文と兄も共に退園させ、私もパート勤務を辞めざるをえなかった。

カタコトも出なかった俊文が突然、「いないいないばあ」と言ったのは、保育園をやめて１ヶ月後のことだった。驚いて母も「いないいないばあ」をすると、何度も何度もくり返した。そして来る日も来る日も「イナンナンナンナンバー」と声を上げている。母として、ここから他の言葉を引き出せなかったのか後悔の限りであるが、この声が次第にわずらわしくなってしまい、言葉かけをせずにいるうちに、１ヶ月ほどで俊文の口から消えてしまった。俊文は今でもひとに意思の伝達をする方法を持っていない。俊文に少しでも言葉があれば、もう少し人生を、楽にすることができたのではないか。この思いは今も胸から離れず、山ほどある後悔の１つである。

児童相談所で紹介された東神奈川の小児療育相談センターに１ヶ月に一度通うことになった。ビルの屋上はまだ工事中の新しい療育施設である。初めの半年間はマンツーマンの療育相談でその後、子供たち数人は一緒にプレイセラピーを受け、親はその間、座談会方式で相談の時間という形式が長年続いた。担当の松阪先生は、にこやかに聞いてくださって、ようやく安らぎの場に出会えた思いになった。俊文は駅を降りるとすぐにセンターに向かって駆け出すので、療育センターを気に入っていることを感じた。通い始めて１年ほどたった頃、「自閉症」という診断名を言われた。この頃より新聞に自閉症の記事が出るようになっていた。自閉症には軽度、重度がある。少しでも意思の疎通ができる子になることに望みをつないだ。

翌年春、４歳児の兄を幼稚園に入園させた。周辺は田園地帯が急速に開かれ、団地や公営住宅が建ち、幼い子供の姿が多く見られる地域となっている。園までこどもの足で２０分ほどであるが通園バスはないため、近くに集合場所が定められ、４０人ほどの園児を幼稚園の職員が迎えに来る。保護者は２名ずつ当番を決めて付き添うのだが、園児の下に乳幼児をもつ母親は、近隣の母親が預かって当番を果たすことになる。当番の日は俊文を預かると声がかかったが、扱いづらい俊文を他人の家に預かってもらう勇気はなく、初めての当番の日、俊文の手をひいて園児の列の脇についた。３月

生まれの俊文は３歳児として入園できる年齢になっている。俊文は自分の役目が分かっているように、手をひかれながら声もたてず、脇見もせずに幼稚園まで歩いてくれた。ほっとして、俊文にいじらしさを感じた。帰り道は空き地に積んであった建築用の砂に目をとめて砂の上に屈みこんだ。砂をつかんでは握りしめ、こぶしの下からサラサラと落ちる砂をじっと見つめて、又同じことをくり返す。１０分ほどたったところで、「もう帰ろうよ」と声をかけると、この時はさっと立ち上がった。当番も結構たのしいではないかと満足を感じた日であった。

２度目に当番がまわってきたのは小雨もようの日だった。俊文の手を引いて傘をさせないと思い、おぶい紐で背負って園児たちに付き添った。園まで送り、戻ってくると母親の何人かが私を待っていた。

「いま、私たちで話合ったのですが。大きなお子さんを背負っていて大変ですね。小林さんを、お当番表から外しても良いと意見が一致しました」という。

本人抜きで決まってしまったことに怒りがこみ上げ、私はむきになった。

「私は結婚前まで、北アルプスの縦走や谷川岳でロッククライミングをしていました。ですから、この子を背負うなど何でもないのです」

「でも、もし何かが起きたら、他の子供たちを守ることができないでしょう」

母親たちの表情は慈愛に満ちていた。自分は当番としての役目より、俊文と無事に歩くことしか考えていなかった。説得の言葉に間違いはない。頭を下げて礼を言うしかなかった。むきになった自分が恥ずかしく惨めで、引かれたラインの外側に自分ひとりが出されたような疎外感と敗北感に襲われた。この時、初めて、自分が普通の子を持つ普通の親ではない現実を思い知らされたのである。

自閉症児の親も

一日にしてならず。

ペンネームは
ｍｏｍｏｅ

★momoeさん紹介★
知的障害のある人の地域生活支援をする特定非営利活動法人の理事です。首都圏通勤圏にある某市に夫と夫の母親（要支援 2）、専門学校 1 年の長男と所属法人で新規に設立した作業所 3 年目・21 歳で知的障害と自閉症がある(療育手帳で最重度、障害程度区分 6)の次男と暮らしています。

吹き出物・かさぶた・皮むき　の巻

７月２０日～現在　　次男の右ほほの下のほう（口と鼻の間くらい）に楕円の発赤ができる。その中心部に少し硬めの盛り上がりができており、何かがたまっているような感じ。すぐ家にあった湿疹用の薬をつけたがあまり効き目がないうちに、家族でない支援者との旅行の日になってしまう。一応薬を渡して朝と入浴後つけてもらうよう頼んだが、やはり帰宅時には中央部分が破れてしまっていた。さてそうなると治るまで長くかかるパターンになるかならないかのきわどいところ・・・

　新しいタイプのばんそうこう（浸出液を吸収する）を買ってあったので次男に見せながら貼る。次男はテレビでコマーシャルを見ており、私がそのばんそうこうを買ってきたときから、きれいなブルーメタリックの箱が気に入ったのか何度も見ていた。「これを貼るから、はがさないでね」というと次男は満面の笑顔で貼らせてくれた。何しろ高価なので、ケチって２日そのままにしておいた。

　２日目交換、そのころから暑かったこともあり、ばんそうこうの粘着部の下が少しかぶれ気味になった。そうなるとばんそうこうをはがしてはその下を掻くようになる。ばんそうこうの貼り方を縦にしたり横にしたり（口にかかるのであまり上手に貼れない）色々試すも、ついにはかさぶたになった中心部も掻くようになってしまう。

　ああ、こうなると１ヶ月コース・・・触らずにいれば１週間で治るものが１ヶ月かかるのである。

「掻かずにすむようにする次男への提案」として試したものとその結果は・・・

① 物理的に触れないようにする
　浸出液を吸い取るあてパッドなどをかぶれにくいといううたい文句のテープでばっちり貼りネットで覆う
　⇒誰も見ていないときにはがしてウリウリと触る。

② 次男の目の前に「ばんそうこうを触らない」と書いて貼っておく
　⇒その紙がないところで触る
　⇒わざわざその紙を外した上で触る

③ 次男の指の爪に「×」と書いた紙を貼っておく
　⇒違う指で触る
　⇒手を洗って濡れたついでに指に貼った紙をはがす

④ 指にラバーの指サックをはめてかさぶたが引っ掛からないようにする
　⇒器用にひっかけてかさぶたをはがす

⑤ 長時間触らなかったらほめる
　⇒その時はうれしそうにしているが、しばらくすると触っている

⑥ 触らなくてもいいように手を使う作業を組み立てる
　⇒作業所では昼休み、行き帰りの電車の中、洗濯で水がたまるのを見ている間などちょっとした時間に触る

⑦ 「かさぶたはがし」よりも魅力的な活動を提供する
　⇒見つけきれず・・・

　決め手がなく１ヶ月、使ったばんそうこう数知れず・・・
かさぶたを何回もはがしていると皮膚が少し陥没し、浸出液も出なくなってくる。
それをもって様々な取り組みは終わるのだが、何ともやりきれない敗北感？が残ってしまう。

　さらに今年はおでこのニキビ（吹き出物）が次から次へとでき、それにたいしては朝晩ニキビケアの軟膏をつけているので、ある程度軽減するモノもあり、全部をつぶすわけではないのだが、現在に至るまでニキビつぶし及びかさぶたはがしが続いている。かさぶたをはがすと思いのほか出血するのでおでこから血をだらだら流している次男を見て「これどうしたのっ？！」と驚かれることもたびたびで、なんだか親が虐待しているみたいな感じにもなったりする。

しかしある時はっと気がついた。私の関心がおでこに向いているのを敏感に察知している次男にとってはそれが新たな「こだわり」になっているのではないか。陥没して乾いた後はまだ若いのでそれほど汚くなく皮膚は戻ってくるのだから、こちらは「見て見ぬふり」をして次男の「こだわり」にならないようにするべきだったのかもしれないのではないか。大体２月から５月のあの「止まらないハイテンション」のときにかさぶたはがしをしていたとしたら、これほど私は気にしただろうか。

今っさらおせーんだよ、と次男の目が言っている。スミマセン、まだまだ未熟な母です。

根本的には皮膚科に行ってニキビの根治をする、ということでしょうか。それほどではないと思えるなら威圧的な対症療法にならないよう気楽な処置を心がけるか、ということかも。西原理恵子さんいうところの「多くの仮想敵」をつくって何かに集中して思い悩むことがないようにしてみようかな。

ノートンの《映画、大好き！》

「ポテチ」（2012年）

１２月、師走に入り、街は例年のごとく慌しくなりました。雑踏の中を歩いていると、街中のイルミネーションが色んな場所で見られますが、昔に比べると格段にきれいなイルミネーションです。先日、利用者の方と一緒に行った旅行で長島温泉へ行き、「なばなの里」でウィンターイルミネーションを見ました。そして私の地元近くの神戸では、先日までルミナリエで街がきれいにライトアップされていました。いずれもため息がでそうになるくらいに美しかったですね。なんだかロマンティックな話になりましたが、夜は変わらずせっせとビールを飲み、いい感じで酔っ払っているノートンです。

さて、１１月後半から１２月にかけて、私の勤めている施設でノロウィルスの罹患者数が拡大し、ウィルスとの見えない戦いから、肉体的にも精神的にも少し疲れ気味でして、ここ2ヶ月ほどは映画を観る時間があまりとれませんでした。自宅で細々とDVD鑑賞は続けており、その中で面白い映画があったのでご紹介します。「ポテチ」という邦画です。

では簡単にストーリーを・・・

物語の舞台は東北仙台。空き巣を生業にしている青年の今村（濱田岳）は、自分が専務と呼んでいる親分と一緒に仕事をしていた。恋人の若葉（木村文乃）と一緒に生活もしており、仕事は別にして、特段変りのない平凡な生活。ただ、今村の中で最近気になる人物がいた。それはプロ野球選手の尾崎である。同じ空き巣家業の先輩である黒澤（大森南朋）から尾崎の自宅の住所を聞き取りそこへ空き巣に入ったり、尾崎の家で若い女性が助けを求める留守番電話を偶然に聞くと、その女性に会ってなんとか力になろうとしたり。恋人の若葉にはそんな今村の気持ちがわかりかねていた。そこへ、今村の母親が息子に会いに仙台にやってくる。だが、今村は変わらず突然泣き出したりして落ち着かない様子。果たして今村の揺れる気持ちの原因は何なのか・・・。

以前にご紹介した「アヒルと鴨のコインロッカー」と同じく、原作が伊坂幸太郎さんで監督が中村義洋さんの映画です。このコンビは他にも「ゴールデンスランバー」「フィッシュストーリー」というおもしろい映画を撮っています。切ないお話なんですが、暗くはなく、観ていて爽やかな気持ちになれる映画でした。上映時間が６８分と非常に短いのですが、６８分で十分に満足のいく内容です。濱田岳さん、大森南朋さんはよい雰囲気を持った役者さんです。音楽が私の好きなアーティストの斉藤和義さんというのも最高ですね。今年観た映画の中でベスト5には入ります。おススメです。ぜひご鑑賞あれ。

FM やまびこ　番外編　その2

「やまびこバザー」の見学

管理部　草島　聡

私は、横浜やまびこの里の管理部経理グループで法人本部会計を担当しています。ご支援者より頂く寄附のほとんどは、私が担当する法人本部会計に収入として計上していることから、法人全体の寄附担当者でもあります。

法人本部会計を担当して３年目を迎えた平成２３年１２月、ある方よりご寄附をいただきました。会計処理にも慣れ、寄附担当者として少しずつ寄附をくださる方々のことを知りたいと思っていたため、当法人の関水施設長に確認したところ、「おお、やまびこバザーの中山芳子さんだよ！」「自宅でバザーやっているんだよ」と教えられました。

当法人は、法人設立のための資金調達や自閉症を地域住民に知ってもらうことを目的として、毎年様々なバザーを開催してきました。しかし、開催主体である親の会等の負担も大きく、年々開催が困難となり、現在では東山田地域ケアプラザが毎年夏に開催する「ケアプラ祭り」に出店するのみとなりました。

このような状況の中、現在でも当法人の支援を目的としたバザーを個人で行っていることに感動し、中山さんに手紙を送り、１年後の平成２４年１１月２２日に中山さん宅のバザーを見学させていただきました。

中山さんがバザーを始められたのは昭和５９年のことで、それはちょうど当法人が法人設立の認可を受けるために、親の会等が必死の思いで設立資金を集めている頃でした。中山さんは、学生時代からお付き合いのある友人が、当法人の設立資金のためにバザーを開催していることに賛同され、法人設立資金の調達を目的とした「やまびこバザー」を自宅で始めました。

やまびこバザーは、横浜市青葉区の小高い丘の閑静な住宅街で年１回（１１月）開催されています。バザーでは、大阪のカシミヤ会社から譲り受けた鮮やかで良質のカシミヤのセーター、マフラー、靴下、心のこもった美味しいケーキ、クッキー、おこわ、中山さん手作りのアクセサリー、近隣の福祉施設で作られたキーホルダーや野菜等、色とりどりの商品が自宅のリビングを賑わしています。

セーターやマフラー

色々な野菜

中山さんは、今年で２９年目を迎えたバザーを振り返り、バザー開催中は家族の食事や世話ができなくて迷惑をかけたこと、お父様の介護をしながらバザーを開催し大変だったこと、自分で作った小物が売れて嬉しかったこと、開催当初の設立資金の調達という目的から今では地域住民等の安否確認に目的が次第に転換してきていることなどたくさんの思い出を話してくださいました。

横浜やまびこの里は法人設立後、２４年目を迎えました。これまで当法人をご支援くださった中山さんをはじめ、多くの方々に感謝し、その想いをいつまでも大切にしていかなくてはならないと改めて感じました。今回、貴重なお時間をくださった中山芳子さん、本当にありがとうございました。これからも暖かいご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

現在、当法人では、ホームページをリニューアルしています。リニューアルされたホームページに来年の「やまびこバザー」の開催案内を掲載いたしますので、是非ご確認ください。

バッグなど

アクセサリー

ホームページ☆
ご覧下さい！

―自閉症者の地域生活を援助する―
社会福祉法人
横浜やまびこの里
http://www.yamabikonosato.jp/index.php

クリック！！

「わが子が発達障害と診断されたら
～発達障害のある子を育てる楽しみを見つけるまで～」

佐々木正美 編著　諏訪利明 著　日戸由刈 著　　すばる舎

街中の普通の本屋さんの書棚に、最近は「自閉症・発達障害コーナー」なるものがあり、そこで手にした本がこれです。

児童精神科医である佐々木氏は、ご自身の家族とのエピソードを交えて発達障害の連続性（スペクトラム）についてわかりやすく語られています。また、医療者として「もし家族と社会が対峙することになれば家族の立場に･･･けれども、もし子どもと親が対峙することになったら迷わず子どもの側に立つ･･･」つまり、「発達障害の子どもを理解してもらうための代弁者になる」と述べられています。昨今、社会全体が昔に比べて「自分にとって好ましくないことを受け止める力の衰え」が顕著であることにも触れ、そのことが子育てや人間関係にも影響しているのではないか、という指摘は、臨床医として長年携われた氏であるからこそ、説得力あるものとして伝わってきます。

臨床心理士である諏訪氏は、現在は川崎医療福祉大学准教授ですが、この本を書かれた当時は海老名市立わかば学園の園長職に就かれていました。本の中でも、ある発達障害の子どもと家族が通じ合った瞬間の話がとても印象的で、コミュニケーションマインドを育てるためには、まずはその子のことをちゃんと理解することがスタートライン、という事を実感します。そのプロセスを経ていくなかで、「（発達障害のある子）少数派ならではのオリジナルな子育ての楽しみ」が見つかるはず、と示唆してくれます。

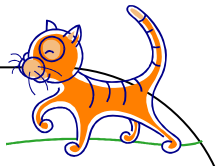
そして自称‘3つの顔’をもつ日戸氏は、重度の知的障害を伴う自閉症のお兄さん（享年42歳）がいた家族の視点，横浜市総合リハビリテーションセンターでの臨床心理士職として，また、亡くなられたお母様の志を継いで高機能自閉症の方が暮らす生活寮を支える身近な支援者･･･という専門家であり家族やその近親者の立場で、特に高機能特有の難しさについて語ってくれます。

三氏の文章からは、ご自身のプライベートも交え、仕事を通じて出会った発達障害の子や家族との関わりの中から多くの事を感じ、学び、それが専門家自身の支えにもなっている事がとてもよく伝わります。まさに子育てをしている親御さんにとって、元気の出る本だと思います。

また、発達障害（自閉症）の子（人）の「特徴や違い」をきちんと理解した上でできるところを認め、肯定的に関わる事がいかに大切か、という事をあらためて認識できる、マンやま新春号にふさわしい一冊です。

＜西尾　紀子＞

＊お詫び＊
前号の表紙の「本棚から」の著者に誤りがありました。「西尾紀子」と記載しましたが、正しくは「津村康」でした。失礼いたしました。



よこはま三歩

初めまして。今年度の４月から東やまたレジデンスで働いている入江麻美と申します。よろしくお願いいたします。

地元の茨城から神奈川に引っ越して来て早９か月程が経ちましたが、この辺りのことはまだまだ分からないことばかりです。そんな私が横浜について書けるようなところなどあまりないのですが、今回は私の家の近くにある公園について書きたいと思います。私が今住んでいる家の周りにはいくつか公園があり、休みの日になれば多くの家族連れや小学生が遊んでいたりします。時折仕事帰りにその公園の近くを通るのですが、鉄棒の練習をしている親子やキャッチボールをしている親子の姿を見ていると、とても心があたたまるような気持ちになります。都会にあるような大きくて立派な公園ではありませんが、地域に密着したアットホームな感じの雰囲気が私はとても気に入っています。秋には紅葉がとてもきれいでした。

私は休日の過ごし方がどうしても家に引きこもりがちになってしまうので、たまには外に出てそんなほのぼのとした休日を過ごすのもいいかもしれません。まだ少し気が早いかもしれませんが、春にはお弁当を持ってお花見にでも出かけてみようかと思います。

東やまたレジデンス　入江麻美

△▼横浜やまびこの里後援会▼△

横浜市内で自閉症という障害を持つ人たちが地域で生活をするためのサービスを、一つずつ作り出していく活動をしている『社会福祉法人横浜やまびこの里』の活動のバックアップを目的としています。

入会された方には「マンスリーやまた」「後援会報」をお届けします（郵送）

会員種別	個人会員	法人会員
会費	1口　3，000円／年	1口　10，000円／年
入会時期 （定時入会）	7月または1月	
会費納入方法	(ア)7月入会者 7月～12月入会者は当該年度の会費を納入し、次回からの会費は翌年の7月に納入し、以後毎年7月となります。 (イ)1月入会者 1月～6月入会者は当該年度の会費を納入し、次回からの会費は翌年の1月に納入し、以後毎年1月となります。	
振込口座 （郵便振替）	横浜やまびこの里後援会　〈口座番号〉00240－3－76163	

★後援会のお申し込み・お問い合わせ★

横浜やまびこの里　後援会事務局　　TEL045（591）2728

～編集後記～

一部地域では 15 日までという説もありますが、松の内も明けて、すっかり、いつものペースに戻ってしまいましたね。時間が過ぎるのが早いのか、風情が薄れて行っているのか、どちらにしても一抹の寂しさを感じますな。さて、賀状に「蛇のように細く長く」と書こうとしたら、「あなたの場合は、ツチノコね！」と横槍が･･･。確かに「食っちゃ寝」「飲んじゃ寝」しちゃったな！また一回り人間（実は胴回り）が大きくなりました。

表紙写真　ペンネーム：国鉄福私鉄道（こくてつふくしてつどう）
編　　集　社会福祉法人横浜やまびこの里　（編集責任者　小林信篤）
横浜市都筑区東山田町 270 番地
TEL.045-591-2728/FAX.045-591-2768
法人ホームページ http://www.yamabikonosato.jp/
印　　刷　ワークステーション　横浜市神奈川区西神奈川 1-14-6-1F　TEL.045-316-5710
発 行 人　神奈川県自閉症児・者親の会連合会　代表者　内田照雄
厚木市愛甲 2-11-6-109
購読料１部　５０円（税込み）